



# 学内学会会報 第26号

## 松井清先生を偲んで

渡辺 雅子(社会学部教授・社会学科)



松井 清先生

2016年8月、松井清先生が逝去された。明治学院大学を定年退職して1年4か月後だった。ここ何年かのあいだは、病気がちでいらしたが、それでもこのように早くお別れの日が来ようとは思ってもよらなかった。松井先生は1977年に明治学院大学に着任され、38年の長い年月にわたって、明治学院大学にさまざまな面で貢献された。

学内学会では2015年3月、卒業生部会主催の春の講演会・懇親会を松井先生の最終講義と退任記念パーティとして行った。この準備は全くアナログなものから始まった。松井先生が卒業生からの年賀状をもってこられて、それを基礎に学内学会事務局で案内を出した。松井先生は、「参加者は30名くらいじゃない？」などとおっしゃっていたが、実際は150名もの人々が集まった。国内はもとより、遠くはシンガポールやソウルからもゼミの卒業生が駆けつけてきた。古い時代の卒業生にとって、久しぶりに松井先生とお目にかかった人は、その風貌に接して驚いたのではないだろうか。なぜなら、元はポッチャリ系だった先生が、大風がきたら吹き飛ばされそうな感じに、痩せて細くなくなっておられたからである。

訃報に接し、松井ゼミの卒業生については何とか連絡せねばと思った。しかし、最終講義の時の名簿は先生にお返しして学内学会事務局にはないということで、不十分ではあったが連絡先がわかる人に伝えた。松井ゼミの卒業生は最終講義や退任記念パーティへの参加をきっかけに旧交をあたためたということなの

で、その連鎖で、ある程度の範囲まで知らせが回ったと思う。卒業生からは、最終講義に行って、先生にお目にかかることができ本当によかったという声が聞かれた。通夜や葬儀をどのようにして知ったのか、ゼミの卒業生以外の見知っている在生も来ていた。基礎演習でお世話になったとのことであった。松井先生はとても学生思いの人だった。学生のことを親身になって心配していた。そうした人柄が人々を惹きつけたのだと思う。

松井先生はかつて社会学原論という理論系の2年次の必修科目を担当しておられた。その後社会学科のカリキュラム改編の中で、比較社会学という科目を担当されるようになった。先生の比較社会学への道筋は、『学内学会会報』第24号(2015年5月発行)に掲載された「私と『国際化の社会学』」に詳しい。実は最終講義では、なんと万葉集から話が始まり、先祖の地である滋賀県の近江商人の話に展開し、いったいどのようにご専門の比較社会学のテーマに着地するのだろうかと内心ヒヤヒヤした。『会報』には時間切れで詳しくはお話になれなかった比較社会学へ導かれたきっかけや学問的関心の展開が述べられている。1986-88年のイギリスでの在外研究での体験からエスニック・マイノリティと学校教育の問題に関心をもたれたこと、国際交流センター長としての仕事との関係で北アイルランドの大学との関連ができ、1998年に二度目の在外研究で北アイルランドに滞在され、そこが研究対象となったことなどである。松井先生の研究の手法はフィールドワークではなく、資料を丹念に読みこみ、そこからアプローチしていくものであるが、インド亜大陸等からイギリスに移住したエスニック・マイノリティの子供たちの教育問題については、『教育とマイノリティ文化葛藤のなかのイギリスの学校』(弘文

堂、1994年)としてまとめられた。次に北アイルランドのご研究は、北アイルランド紛争の歴史社会学的研究である『北アイルランドのプロテスタント—歴史・紛争・アイデンティティ』(彩流社、2008年)という書物に結実した。そしてさらに、ご退職の年度には最後の著書となった『アルスター長老教会の歴史—スコットランドからアイルランドへ』(慶應義塾大学出版会、2015年)が出版され、松井先生は三冊の大著を残された。

大学の教員の仕事には、教育、研究、学内行政があるが、松井先生はそのいずれも真摯に取り組まれた。学部長であったときも国際交流センター長であったときも副学長でいらしたときも、明治学院大学のために本当によく勤められたと思う。

松井先生とのこのような早いお別れは悲しいが、

2009年に心臓バイパス手術を受けられた後、体調に不安を抱えておられたので、まずは定年まで無事に勤め上げることを願っておられた。その願いはかなえられたので、よしとしなければならないのかもしれない。しかし、これからもご教示いただきたいと思っていたのに、あまりにも早いお別れは寂しく、残念な気持ちがあることも事実である。松井先生の含蓄のある、そして時にはシニカルな、するどいお言葉をまじえながらも、なぜかユーモアに満ちたお話と飄々とした風貌を、いまだにあたかも生きておられるように思い出す。あのような味わいはなかなかだせるものではない。

今後、明治学院大学の行く末には、さまざまな課題や試練があると思われるが、大学を愛し、見つめておられた松井先生に天国からパワーをいただきたいものだと思う。

## 総会後の特別講演会

深谷美枝先生・柴田実氏

「スピリチュアルケア～死に直面した人たちの心を支える～」に寄せて

川崎 太郎(社会福祉学科4年)

森合 沙也花(社会福祉学科4年)

2016年6月18日に、第26回社会学部学内学会総会が行われ、その後、社会学部社会福祉学科教授の深谷美枝先生と、明治学院大学研究員でもある聖路加国際病院チャプレンの柴田実氏の講演会が行われた。「スピリチュアルケア」というテーマのもと、講演の前半では、深谷先生のスピリチュアルケアについての概説



柴田 実氏 深谷 美枝 先生

を、後半では柴田氏による事例の紹介という構成で進められた。

スピリチュアルケアとは、所謂心霊主義のスピリチュアルとは違う、人間の魂の問題を扱う深い心のケアである。もともとは、ホスピス運動やキリスト教系の病院の牧師が信者の世話をするというところから始まっており、魂を慰め支え成長を促す、パストラルケアと呼ばれてきた。これは病院以外でもなされていることである。ところが、諸外国の病院ではクリスチャンだけではなく、イスラム教や仏教あるいは宗教を持たない人もおり、キリスト教のパストラルケアだけでは対応できないというところで広まったのがスピリチュアルケアである。

2011年、東日本大震災によって、家族を失った人への心のケアとして、宗教家の活躍がマスコミに取り上げられることが多くなった。「心のケア」は近年注目されているものであるといえよう。2012年には、日本スピリチュアルケア協会が、認定資格であるスピリチュアルケア師を創設した。看護師や医師、社会福祉

士や介護福祉士あるいは宗教家といった様々な職種の人がこの資格を習得している。

社会的関心として、東日本大震災以前から「終活ブーム」もあった。しかし、その内実は、エンディングノートや身辺整理、相続に関することといった、死後の準備が主だったものであり、精神面の終活が伴っていないと深谷先生は指摘し、精神面も含めた本当の終活が必要であると主張する。現実的な問題として、2030年の死に場所難民が発生するという予測がある。「死ぬ」ことについて、現状では、自宅で最期を迎えたいと希望している人が多いなか、現実では多くの人が病院で最期を迎えている。理想の死に場所ではないにしても、死に場所があるということになるのだが、2030年には、病院ですら病床数の問題などで死を迎えることもできないというものだ。2006年のデータでは、2030年に亡くなる人は165万人で、そのうち89万人が病院で、20万人が自宅で、9万人が福祉施設等で亡くなり、残りの47万人は死に場所がなくなると想定されているという。

末期癌患者の終末期ケアに関しては、その存在自体は広く認識されているものと感じる一方で、それについて詳しくは知らないという方も多いのではないだろうか？ 講演を聴いて、日本国内での現状を詳しく知ることができた。

続いて、ゲストの柴田実氏にお話しいただいた。日本スピリチュアルケア学会認定スピリチュアルケア師であられる柴田氏より、病院での経験や患者さんたちの事例を基に、スピリチュアルケアの実際についてのお話をしていただいた。スピリチュアルケアについて、あまり馴染みがなかった私たちが、死に直面した人々に対し、どのような精神的ケアが必要なのか、また自分が直面した際、どのように「死」を受け止め、残りの時間を過ごすのかを考えることができた、非常に有意義な講演であった。

柴田氏がスピリチュアルケアを志したきっかけは、末期の癌であったお父様の最期を看取った経験である。そこから、病院のチャプレンを目指すようになったそうだ。その後、関西学院大学の神学科で勉強され、教会の牧師を経て、在宅ホスピスのチャプレンを経験され、現在に至る。

柴田氏は聖路加国際病院のチャプレンとして、病院の礼拝などの宗教行事と、患者さんのスピリチュアルケアを担当されている。特にケアを行う際は、医師や看護師と連携し、各科のカンファレンスに参加するな

ど、チーム医療を行っておられる。

スピリチュアルケアの基準となることは、患者さんのスピリチュアリティ（価値観、死生観、宗教観）をアセスメントすることである。そこでは痛みを覚えている患者さんがいる。例えば自分の生きている意味が分からず、そのために痛みを覚える。それをスピリチュアルペインと呼んでいる。生きる意味が分からないということは、自分が壊れてしまうような、それ程の痛みであるそうだ。

加えて、患者さん一人一人の価値観、痛みにじっくりと傾聴し、寄り添うことに徹している。これがベースとなり、患者さんとの信頼関係を構築する。必要な場合は宗教的知識、信仰について患者さんに語ることを求められる。

患者さんが自分自身では超えられない心の苦しみを持つとき、超越的な存在や神による慰め、癒しを求めるとことがある。急に祈りを求められ、宗教について問われることがあるそうだ。祈りが終わった後、ある患者さんは涙を流して安心したとおっしゃったそうだ。

そして、実際に柴田氏が関わってきた患者さんたちの事例を取り上げた。1人目は、今までのように走りながら、途中で倒れて死のうとする「生きてきたように死ぬ」ケース。2人目は、やり残したこと、人間関係のこじれを解決しようとして死のうとする「きれいに課題を整理して死ぬ」ケース。3人目は、死の前に立ち止まり、自分を振り返って、神仏、永遠について思いを馳せ、または救いを信じて亡くなる、スピリチュアル覚醒とも呼ばれる「一歩踏み出して死ぬ」というケース。この3つの生死のパターンを語られた。

「生きてきたように死ぬ」ためには、現在の生き方、使命感、生きがいをしっかり持ち、常日頃からそれらについて考えること。「きれいに課題を整理して死ぬ」ためには、中年期から、意識的に家族や知人と和解し、思いを伝え、準備する。「一歩踏み出して死ぬ」ためには、宗教アレルギーを克服して、センスを磨いていく。こうした本当の「終活」が必要ではないかとおっしゃった。

最期を迎えるまでの日々を、それぞれの形で過ごした患者さんたちの様子を聞き、死に直面した方たちがどのように自分の死を捉え、向き合っていくのか、非常に現実的で、「死」は遠い存在ではなく、自分にもあり得る身近なことであると改めて考えさせられた。

最後に、「死」とは非常に大変な仕事であると語る

れた。家族から見ると安らかに亡くなったように見えるが、患者本人は非常に苦しんでいる。死は絶対に甘くはない。死を迎えるまでに、それに耐えうための精神力、構えなどは必要だと感じていると締めくくった。

柴田氏が話された事例紹介を通して、死に直面したときの人があるかをイメージすることができた。癌に限らず、私たちはいつ「死」に直面することになってもおかしくはない。その時、どのように死を受け止め、最期までを過ごすのか、死の苦しみをどう乗り越えるのか。今ある生に感謝しながら、考えていかなければならないと思った。

総会後の講演会では、学生だけでなく、多くの卒業生が参加されていた。そのため、深谷先生と柴田氏の話に、深くうなずきながら聴き入っている方も多く、共感されていた。講演会後の質疑応答も活発に行われ、講演会は予定時間を延長して終了した。

## 2016年度 学内学会活動報告

### ★会報25号発行

5月20日(金) 発行部数 5,000部

### ★第26回総会・特別講演会・懇親会

6月18日(土) 白金校舎 2号館 2202教室

卒業生15人、教職員7人、学生33人、一般1人の計56人が参加。総会後に、社会福祉学科の深谷美枝教授が「スピリチュアルケア—死に直面した人たちの心を支える—」と題する特別講演会を行った。

### ★研究発表会

11月12日(土) 発表は、ゼミ9件(社会学科ゼミ6件、社会福祉学科3件)。個人参加6件(社会学科1件、社会福祉学科0件、社会学専攻1件、社会福祉学専攻3件、卒業生1件)。研究発表会の参加者は、学生80人、教職員14人、卒業生14人、一般6人の計114人(発表者も含む)。今年も、3つの会場で活発な発表が行われた。

#### ○第一分科会(1455教室)

「大学生との遊びによる影響と変化—カンボジアの児童養護施設—」 明石留美子ゼミ

「わが国における高齢者の関係性の希薄化に関する考察」 川本達郎(社会福祉学専攻博士前期課程)

「ソーシャルワーカーの意思決定支援—専門職後見人としての社会福祉士の実践—」

北尾 亮(社会福祉学専攻博士前期課程)

「母性保護／父性保護給付」

米谷あづみ(社会福祉学専攻博士前期課程)

「パターンリズム研究の先にあるもの

—パターンリズム研究の歴史に関する考察から—」

石渡拓也(2012年社会学科卒業)

#### ○第二分科会(1456教室)

「恋愛関係における行動—形成・解消・結婚—」

鬼頭美江ゼミ

「友人・集団・SNSにおける対人関係について」

鬼頭美江ゼミ

「在日中国人の子どものエスニック・アイデンティティ形成とネットワーク」

李 瑋莎(社会学専攻博士前期課程)

「日本における離婚後の子どもの養育はどうあるべきか」

野沢慎司ゼミ

「日本における難民制度の現状と今後のあり方」

入江謙行(社会学科3年)

#### ○第三分科会(1451教室)

「鹿児島県南大隅町“やねだん”の活躍と地域復興」

浅川達人ゼミ

「過疎地域存続に向けた取り組みと行方

—対馬市の事例より—」

石川雅典実習

「アニメ『聖地』とまちおこし—らき☆すたとガルパンを比較して—」

渡辺雅子実習

「葛飾区における町内会・自治会の現状と課題

—自治町会長アンケート調査の結果を踏まえて—」

河合克義ゼミ

「葛飾区における町会・自治会活動の実態

—事例調査を通して—」

河合克義ゼミ

### ★社会学部・卒業生部会企画 春の講演会

「沖縄のいまを語る—基地問題を中心に—」

3月4日(土) 沖縄タイムスの福元大輔さんを演者に迎え、白金校舎3号館3101教室にて開催された。参加者は教職員を除き70名。講演会は、まさに、「沖縄のいま」を私たちに教えていただく会となった。その後、福元さんと吉原功・社会学部名誉教授と対談、質疑があり、fake newsを拡散される日々についてもお話された。「沖縄」の抱える問題は、実は日本という国が抱える問題であることを、再度自覚することになった講演会だった。

その後、懇親会が開かれ、約30名の方々の参加があった。福元さんもお参加いただき、講演会では聞けなかった話なども個人的にお聞きできる場となった。



春の講演会の様子

★Socially25号発行

3月16日(木) 発行部数 3,000部。

2016年度 学生部会活動報告

★社会学部スポーツ大会

(担当 伊良波クルーズ・池田沙織)

5月28日(土) 白金アリーナ。競技参加は7チーム、競技参加者は35人、運営の学生委員14人、教員2人の計51人。

障害物競走、ドッジボールの2種目で競技。横浜校舎での戸塚まつりと日程が重なってしまったにもかかわらず、多くの参加があった。ゼミの先生方の参加もあり、また他チームに混ざって参加する人もあり、大いに親交を深めることができた。

★社会学科ゼミサロン

(担当 大井川蒼哲・荒木聡良・藤山輝太)

10月11日(火)、13日(木)、14日(金) 白金校舎。3日間の参加ゼミは16ゼミ。来場者133人、運営の学生委員35人(3日間の合計)。お昼休みを利用した短い時間だったが、来場者は積極的に質問し、ゼミ生は真摯に対応している様子が見受けられた。

★戸塚会議(担当 徳田結以・高松花希)

10月26日(木) 横浜校舎。戸塚会議は、学生部会が日頃どのような活動をしているのかを紹介する企画であり、参加者は、1年生1人、運営の学生委員9人の計10人。お昼休みを利用して開催した。来場者は活動内容や大学生活への不安についても質問し、学生委員と

の親睦を深めることが出来た。

★社会福祉学科卒業生と在学生の交流会

(担当 川崎太郎・森合沙也花)

11月6日(土) 白金校舎。参加者は、卒業生26人、在学生24人、運営の学生委員12人の計62人。前半の合同交流会では、8班に分かれてのグループワーク。後半は、卒業生が働く10分野の仕事内容ややりがいを話してもらった。1年生の参加が多く、卒業生との親睦が深まり好評だった。

★社会福祉学科1年生コースガイダンス

(担当 鈴木滉介・相場洸風)

11月10日(木) 横浜校舎。1年生30人の参加があった。ソーシャルワークコース、福祉開発コース、それぞれの説明の後に、個別に質問する学生も見受けられた。

★上映会「GATTACA」(担当 小林淑乃・池田沙織)

12月6日(火) 白金校舎。参加者は、来場者28人、教員1人、一般2人、運営の学生委員15人の計46人。遺伝子操作によって管理された近未来の世界を描かれた映画で、来場者からはとても好評だった。

異動・消息

2016年5月 三浦恵次名誉教授ご逝去

2016年8月 松井清名誉教授ご逝去

2017年4月 社会福祉学科に三輪清子専任講師が着任  
事務局員として長年学内学会を支えてくださった佐々木敬子さんが、2016年12月に退職されました。その後は込宮美沙子さんが事務局員となりました。どうかよろしく願いいたします。

学内学会 新体制

会長	北川 清一 (社会学部長・社会福祉学科教授)
副会長(主任)	岡本多喜子 (社会福祉学科教授)
副会長	柘植あづみ (研究所所長・社会学科教授)
編集担当	野沢 慎司(社会学科教授)
企画担当	佐藤 正晴(社会学科教授)
会計担当	岡 伸一(社会福祉学科教授)
卒業生部会委員長	竹村 祥(1972年卒業)
学生部会委員長	大井川蒼哲(社会学科3年)
事務局員	込宮美沙子

## 2017年度 学内学会活動予定

- 4月3日(月) 新入生ガイダンスで広報(白金校舎)
- 5月19日(金) 会報26号発行
- 5月24日(水) 第1回合同役員会議
- 6月4日(日) 社会学部スポーツ大会
- 6月17日(土) 第27回総会・特別講演会・懇親会
- 8月下旬 学生会夏合宿
- 11月上旬 社会学科ゼミサロン
- 11月中旬 社会福祉学科1年生コースガイダンス
- 11月中旬 社会福祉学科卒業生と在校生の交流会
- 11月中旬 社会学部研究発表会
- 2月中旬 第2回合同役員会議
- 3月上旬 卒業生部会主催「春の講演会」(予定)
- 3月中旬 Socially26号発行

### お知らせ

社会福祉学科卒業生からの国家資格についての問合せは、学内学会事務局が、メールまたはファックスで受け付けます。後日、社会福祉学科に問合せ、わかる範囲で回答いたします。

### 編集後記

私のAO入試の面接官が松井清先生でした。「おお君か、待っていたよ！」と穏やかな笑顔で声をかけていただいたことが今でも忘れられません。その一言で大学が好きになり今の自分がいます。どこかで再会する時に、「また会えたな！待ってたよ」と言っていただけよう自己研鑽に励みたいと思います。松井先生のご冥福をお祈りします。

(学生会編集担当 社会学科3年 福嶋康介)

連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37  
明治学院大学社会学部附属研究所内  
明治学院大学社会学・社会福祉学会  
E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp  
会費振込先：郵便振込 00170-5-96903  
明治学院大学社会学・社会福祉学会

※住所変更の際はハガキ又はメールでご連絡下さい。

## 第27回総会・記念講演会のお知らせ

今回、総会後に開催される特別講演会の講師は、大久保製薬所闘争の当事者であり、本学部卒業生である長崎広さん(全国一般労働組合全国協議会東京東部労働組合 副執行委員長)です。DVD『人間を取り戻せ!—大久保製薬所闘争の記録—』を鑑賞したあとに、実際のお話を伺いたいと思います。

製薬では大手の大久保製薬は、身体障害者や知的障害者の雇用にも力を入れており、厚生大臣からの表彰も受けていた優良企業とされてきました。しかし実際には、障害者への暴力が横行しており、その実態を知った長崎さんを中心に障害者の労働組合が結成されました。そして1975年から裁判闘争が継続し、和解までに21年9か月かかりました。

多くの方々のご参加をお待ちしております。

日時：2017年6月17日(土)  
14時(受付開始13時30分)  
会場：明治学院大学 白金校舎  
2号館3階 2401教室

1. 総会 14時~14時45分  
議題：(1) 会長挨拶  
(2) 議長選出  
(3) 2017年度学会役員について  
(4) 2016年度活動報告および決算報告  
(5) 2017年度事業計画および予算  
(6) その他
2. 特別講演会 15時~16時30分  
『人間を取り戻せ!—大久保製薬所闘争の記録—』上映と講演  
講演者 長崎広(濱野ゼミ卒業生)  
講演テーマ 働く障害者への差別・虐待と闘う
3. 懇親会 17時~18時30分  
(会場はパレットゾーン白金2階インナー広場「さん・サン」)